

『お前の首輪はキスマーク』

著：高月まつり

ill：すがはら竜

「ババアの所の座敷牢の方が広かった」

自分の部屋に入れた途端、黒耀は不満と言う名の感想を言った。

「祖母さんちは金持ちだし本家だからでかいんだよ。今の日本はみんなこんなもんなんだから、いちいち文句言うな」

「お前もうるせえ」

文句は言うが、部屋の中にあるものは気になるようで、持っていた着替えを放ると、棚に飾ってある写真を見つめたり、ベッドに手を押し当てて「おおお」と喜んでいる。

「黒耀はこっちの布団な？ ちゃんとした来客用の布団だから……って、なんでベッドに寝転がってる」

「俺はこれが気に入った。なるほど、今まで気にしたことなかなかったけど、ベッドって寝心地がいいんだな。あと、弾む」

「俺のベッド……」

「お前がそっちで寝ろ。俺はここで寝るって決めた」

よほど気に入ったのか、尻から尻尾が出て、ふわふわと動いていた。

だったらまあ、ここで喧嘩をして険悪になるよりも、譲ってやった方があとが楽だ。

「じゃあ、それでいい」

「融通が利かねえ人の子と思ったが、結構気が利くじゃねえか」

「お前を怒らせても俺に得はないし」

「ふふん」

ずいぶんご機嫌だな。しかしあの尻尾モフモフ……触ってみたい。

ふわふわと揺れる大きな尻尾を見ていたら、黒耀に「猫か」と笑われる。

「いや、その尻尾は気になるだろう。人類として、触ってみたい衝動が起きるのは当然」

「誰が触らせるかよ」

「……そうだった。まだ慣れる前だった。楽しみは調教が終わってからにする」

「はあ？」

黒耀は体を起こし、しかめっ面で幸倫を見た。

「なんだよ」

「調教ってなんだよ」

「俺も話でしか聞いたことがないけど、人間と獣が共に力を合わせて働いて行こうなって契約をスムーズに行うための、準備期間みたいなもんかな。黒耀が俺の命令に素直に従うようになれば、調教終了で契約が交わされる？ みたいな。今度、契約の本を読んでおく」

「それって大事なことじゃねえの？」

「大事だけど、覚えてないのに適当なことは言えないだろが」

「ふうん」

「ところで俺はこれから風呂に入るんだけど……」

「俺はいい」

「俺のベッドで寝るのに風呂に入らないとか信じらんねえ」

「……ったく、人の子はうるせえな！ 入るからお前が俺を洗え」

「え？ ……………えっ！」

黒耀はその場で帯を解き、着物を脱いだ。

着痩せするのか、なかなか立派な体が露わになる。

ちょ、ちょっと待て、目の前でいきなり脱ぐな、こっちが恥ずかしいっ！ しかも立派で腹が立つ！

幸倫は慌てて視線を逸らすと、黒耀は「湯殿へ連れて行け」と偉そうに腰に手を当てた。

黒耀が抵抗したのは、風呂上がりの脱衣所でドライヤーで髪を乾かす時だけだった。

現代に生き続けている獣なら、文明の利器にも詳しいもんじゃないかと思ったが、そうでもないらしい。本気で喧嘩しそうなところを、騒ぎに駆けつけた晶斬に救われた。

彼が「こんな温風を怖がるとは」と鼻で笑ってくれたお陰で、黒耀は髪が乾くまでプルプルと震えながら必死に堪えた。

本当にドライヤーを怖がる犬のようで、気がつく尻尾だけでなく耳まで生えていた。

「終わったぞ」の言葉で見せてくれた安堵の笑みは、なかなか可愛かった。

今はジャージとハーフパンツを穿いて、人のベッドで気持ち良さそうに眠っている。

こんなんじゃ俺、やっていけるのかな。……いやいや、弱気になるな。一ヶ月は短いと思ったが、だがみな、それで契約を済ませているから、それが適切な期間なんだ。そういえば父さんと晶斬の時はずいぶん早かったと聞くけど、晶斬はいい奴だから父さんは苦労しなかったんだろう。やっぱ、獣との相性が大事だよな。

黒耀の規則正しい寝息を聞いて、「獣も普通に睡眠を取るのか」とちょっと楽しい。

俺も寝よう。そんで、明日になったら祖母さんから貰った獣の本をちゃんと読もう。きっと大事なことが書いてあるんだ。

真新しい来客用の布団は自分の匂いがついてないから落ち着かない。

それでも横になっていれば眠気はうとうととやってきた。

着替えて、顔を洗って、食卓に着く。

気持ち良さそうに寝ていた黒耀を起こさずに、幸倫は制服に着替えてダイニングに向かう。

テーブルの上には三人分の朝食と、幸倫用の弁当が置いてあったが、それを作った晶斬の姿はなかった。

「おはよう兄さん。晶斬は、父さんに呼ばれて出かけた」

「おはよう、幸成、幸与。そっか。晶斬の食事かな？」

幸成は「そうかもね」と言って、熱々のトーストにバターを塗って、妹の皿に置いた。

「お兄ちゃん、黒耀は？」

「ここにいる」

幸与の問いかけに答えたのは幸倫ではなく、黒耀本人だ。大きなあくびをして眠そうに立っている。

「おはよう黒耀。ねえねえ黒耀は何か食べられる？」

「いや。人の食いもんは食わねえ」

「晶斬と一緒になんだね」

「まあな」

「一緒に食べられないのは残念です」

どこで覚えたのか、幸与は大人びた口調でため息をついた。

「まあでも、人の子が飯を食ってるところを見るのは、嫌いじゃねえよ」

黒耀は勝手に幸倫の隣の席に着き、腕を組んで幸与を見つめる。すると幸与は嬉しそうに頬を染め「美味しい気持ちは一緒なのね」と言った。

「はは、意味わかんねえ」と黒耀は笑ったが、それも嬉しいのか、幸与は「今日はピーマンも食べられそう」と、苦手な野菜にフォークを突き刺す。

「ねえ黒耀。俺たちが学校に行っている間、黒耀はどうするの？」

幸成の質問には、幸倫が答えた。

「俺が学校に連れて行く」

「面倒くせえ」

「名前を付けた俺の言うことを聞けよ」

「そこまで制約されてねえけど……暇だから行ってやってもいい」

超絶上から目線で言われてピクリとこめかみが怒りで震えたが、契約まで一ヶ月という期間限定のために、ここは堪える。

「来てくれ」

「そうやってお願いすれば、可愛げもあるってもんだ」

ああこいつ、綺麗な顔でゲス笑いしやがって！ 腹立つ！ 絶対に契約を結んで使役してやるからな！

将来は「ブラック企業・鑑夜幸倫」になってやる！

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている黒耀の横で、幸倫は心に誓った。

身支度を済ませた弟妹を先に送り出し、戸締まりと火の元を確認してからドアを閉めて鍵を掛ける。黒耀は姿を消したわけではなく、指定バッグにぶら下がる「黒い犬」のマスコットになっていた。提案したのは幸倫だが、ずいぶん大きなマスコットにちょっと照れくさい。

「さて行くか」

『腹が減ってきた。さっさと穢れの場所へ連れて行け』

声が直接頭に響くのは慣れないが、マスコットがしゃべり出すよりはマシだと我慢する。

その時、幸倫の携帯電話がメール着信音を響かせた。

父さんからかな……と思って確認すると、「鑑夜真更」という見たくもない名前が目に入る。

無視をしたいが、無視すればするほど何度もメールを送って寄こすのが気持ち悪いので、適当に返事をする決めていた。

「どうしようもない、キモイ従兄だ」

メールを開いて中身を確認する。

幸ちゃん、十八歳の誕生日おめでとう。

そして獣を手に入れたそうだね。君の魅力で獣もきっとイチコロさ。きっとすぐに調教終了して契約できるよ。そしたら一生こき使ってあげればいい。それと、今度僕と一緒にご飯を食べに行こうよ。ロマンティックなレストランを見つけたんだ。僕の可愛い幸ちゃん、今度会えるのを楽しみにしているよ。君の素敵な従兄、真更より。

P.S.そろそろ恥ずかしがらずに、僕の気持ちに伝えてくれてもいいよね？

なんで朝っぱらから、こんな変態メールを読まなきゃならないんだ。

幸倫は目頭を押さえて、肩を落とし、それでも「メールをありがとう。獣と契約できるように頑張ります！」と顔文字付きで返信する。

『面妖なのは俺にも伝わる。とんでもない従兄がいるもんだな』

「なんでか、俺を気に入ってんだよな。相手の気を引くようなことは何一つしてないのに」

『ふうん』

黒耀はそれきり黙り、幸倫は彼の食事のために、学校途中の三叉路に向かった。

そして、三叉路に辿り着いたと思ったら、そこには従妹の暁月桜彩がいた。大きなリボンが特徴の、淡い色を使ったお嬢様学校の華やかな制服は、朝の登校時間には目立つ。幸倫の高校の制服はグレーと紺を主体にしたものだから余計にだ。

男子生徒たちはいろんな意味で眩しそうに桜彩を見つめ、頬を染め、女子生徒は厳しい視線で値踏みしていく。

彼女は人前では笑顔で幸倫に近づき、「そこの角を曲がってよ」とドスの利いた低い声で彼を従わせ

る。

幸倫が抵抗しないのは、抵抗したらますます面倒なことになるからだ。

クラスメイトが「おい鑑夜、その子は？」と声を掛けてきたので、「従妹だ」と答えた。信じてくれるかわからないが、取りあえず言った。

生徒たちの列から離れるように角を曲がって路地に入り込む。そこでようやく、桜彩が被っていた猫をすべて脱いだ。

「なんなの？ 幸倫。なんだっての？ あんた。たかが私より一ヶ月早く生まれただけで、なんでそんな上位の獣をもらえるの？ 信じらんない」

桜彩は直系次女の子供で、末っ子の息子として生まれた幸倫を子供の頃からバカにしていた。

彼女にとって年功序列は大事らしいが、幸倫が自分よりも早く生まれたことがとにかく許せないらしい。常に「ドロップアウトした末っ子の子供のくせに」と言って、幸倫と張り合った。

本当に面倒臭い。

「私にその獣を寄越しなさいよ。もうすぐ十八歳になるんだから、少しぐらい早く貰ってもいいと思わない？ ね？ 思うわよね？ 大体、あんたにそんな強い獣なんて使えないんだから。どうせ落第するのがオチなんだから、恥をかく前に私に寄越した方が身のためよ？」

外見だけなら可愛いのに、どうしてこんな性格になったんだろう。きっと伯父さん伯母さんたちが甘やかしたんだろうな。さっさと話終わんねえかな……。

視線を逸らして無視していたら、「ちょっと、話を聞いてんの？」と肩を押された。

その途端、マスコットだった黒耀がその場に姿を現す。

今の時代に合った、黒のライダースジャケットとプリントTシャツ、ボトムはカーキ色のスリムパンツで、足元はブーツだ。晶斬のチョイスは、黒耀によく似合っていた。

「うっせえよ小娘」

「え？ 何？ 誰この美形！ この冷たい感じが凄くステキ！ 口は悪いけど、でもハートは温かくてぶっきらぼうな優しさでいつも包んでくれそうなタイプの美形じゃない！ 晶斬も恰好いいけど、私は所帯臭さがいいこっちの美形の方が好き！」

晶斬が聞いたら「そんなに俺は所帯臭いか？」とガックリ落ち込みそうなことを、よくもまあ平然とやってのけたもんだ。

幸倫は早く学校に行きたかった。

「ねえねえ、あなたが幸倫の獣なの？」

「そうだ」

「じゃあ、名前がついちゃったんだ……ううん、でも大丈夫。私のところに来てくれれば、もっといい名前を付け直してあげる。あなたも、こんな愛想のないダメダメな男子より、私のように可愛い女子に使役される方がいいでしょう？ ね？ 私のところに来てよ！」

最初は愛らしく、徐々に脅すように声を張り上げる桜彩に、黒耀は面倒そうな顔を見せた。

「聞け小娘。生憎と俺は、つけてもらった名前を結構気に入ってたよ。意味もいいしな。だから、バカなこと言ってねえでさっさと帰れ。俺は腹が減った」

うは一。気持ちいいな。言いやがった。黒耀のヤツ、言いたいこと言いやがった。それに。

頬が熱くなるのがわかる。

この綺麗な獣は、俺がつけた名前を気に入ってると言ってくれた。凄く嬉しい。

桜彩に睨まれても嬉しい。

「なによ！ 私がそんなことで諦めるとでも思ってるの？ 諦めるわけないでしょーっ！ バーカ！ 欲しいものは絶対に手に入れるんだから！ ねえ、あなたの名前を教えてよ！ それぐらいいいでしょう？」

「黒耀だ」

「そんな平凡な名前がいいだなんて、変わってるのね。……まさか、契約で繋がるより先に体を繋げたの？ だから黒耀は幸倫の傍にいるの？ だったら幸倫は最低ね。手段を選ばないどころか、ただのビッチじゃない。……でもまあ、うん、それはないみたい。名前以外の繋がりを感しないもの。じゃあね黒耀。またそのうち遊びに行くわ」

桜彩は言いたいことを言ってその場から立ち去った。

「……あの女、こっちが手を出せないのをいいことに、言いたい放題かよ。誰がビッチだふざけんなキモイ」

そういえば、先に体を繋げてどうこうとか物騒なことを言ってたな。祖母さんから貰った本を休み時間に読むぞ。絶対に読むぞ！

冷や汗を垂らして誓う幸倫の横で、黒耀が「飯食うわ」と、黒い霧のように現れた穢れに向かって飛んだ。

彼が触れた途端に穢れは消える。

「まだ足りねえ。さっきの道に戻る」

「姿は消して行けよ」

「うっせえな。わかってるって」

声よりも先に姿が消えた。

俺も通学路に戻らないと、と、幸倫は路地を後にした。

鑑夜の従妹は可愛いという噂はすぐに広まったが、相手がお嬢様学校の生徒だとわかった途端にみな二の足を踏む。

まあさもありなん。結局は身近な可愛い女子や話しやすい女子と付き合う方が、いろいろな意味で楽だという話で落ち着いた。

幸倫はというと、四時間目が自習になったのをいいことに、家から持ってきた本を読むことにした。

自習のプリントはないので、好き勝手に時間を過ごす。「息抜き」と言って無音でゲームをするもの、音楽を聴くもの、真面目に勉強をするもの。中には教室を抜け出すものもいた。

本を読んでいると、視界の隅に黒耀が見えた。

彼は今、幸倫の前の席に腰を下ろして教室の様子を観察している。

どんな術を使っているのか、普通の人間には彼の姿が見えていないようだ。

「器用だな」

「器用なもんか。本当なら俺は、お前の目だっでごまかせるってのに。術が上手く使えねえ。最悪だ」

「あー……それな、俺と契約をすれば力が使えるようになるってよ」

「お前のいいなりにならねえと、自分の力を使えねえってことかよ」

「極端なこと言うよな、お前。そういうもんじゃねえって」

ボソボソと小声で話をしていると、隣の席の男子が「何やってんだよ」と突っ込みを入れてくる。それに「喋らないと暗記できないんだ。悪い」ともっともなことを言って、その場を繕った。

ヤバイな。このままだと、ミステリアスな鑑夜君が、独り言を呟くキモイ男になってしまう。

昼休みは、どこか空き教室に隠れよう。

幸倫はそう決めて、黒耀にも「大人しくしてろよ」と言った。

黒耀は「知るか」と悪態をついたが、喋ることはなかった。

学校というのは意外にも穢れがよく溜まるもので、黒耀はそれらを喜んで食べた。

たまに「赤ん坊の味がする」と言って幸倫の眉をひそめさせたが、目的地である二階の資料室に行くまでの道のりは、とても空気の通りが良くなった。

資料室は第一から第四まであり、普通の教室の三分の一ほどの広さしかないが、机と椅子が乱雑に置いてあり、図書室で自習するのが嫌な三年生は、ここで自習することを許されている。

鍵が掛けられないのは残念だが、それでも三年生は有意義に使っていた。

使用中の札を掛け、ドアを閉めて窓を開けて空気を入れ換える。

「一人で飯を食うのか？ 友はどうした」

「今日は一人で食うって言ってあるからいいの」

「ふうん」

黒耀は姿を現し、資料棚に置かれている古い書籍の背表紙を眺めた。

「お前、なんで制服着てんの？」

「見て覚えた。この恰好なら怪しまれねえだろ？」

「それはそうだけど……」

弁当は、大きなおにぎりが二つ。おかずは別容器に入っている。

少々行儀は悪いが、食べながら本を読むことにした。どうしても今日中に読み終えたかったのだ。

「旨いか？」

「ああ……試しに食ってみるか？」

手を付けていないおにぎりを差し出すと、黒耀は首を左右に振った。「満腹だから問題ねえ」と、腹を

さする。

「そうだった」

お陰で廊下は清い気で満ちた。

ふむふむと、食べながらページを捲る。

するとようやく、桜彩が言っていたことに繋がる文章が現れた。太文字で、わざわざ強調線が引かれている。

『獣とは、契約を前にして体を繋げてはならない。繋げるのは心だけにせよ。繋がった心は、契約後に互いを守る力となる』

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>